

書評

現代版ギリシャ悲劇：GREXIT 戦記

福田幸正

シニア・コンサルタント

グローバル・グループ 21 ジャパン

Varoufakis, Yanis (2017), *Adults in the Room: My Battle with Europe's Deep Establishment*: London, Vintage (ヤニス・バルファキス著、朴勝俊 他訳『黒い匣 (はこ) 密室の権力者たちが狂わせる世界の運命—元財相バルファキスが語る「ギリシャの春」 鎮圧の深層』明石書店、2019年)。

この長い本を読み終えた 7 月 8 日の早朝、奇しくもギリシャの総選挙の速報が入ってきた。

【パリ時事】ギリシャで 7 日、総選挙（議会定数 300）の投票が実施された。・・・穏健な中道右派の新民主主義党（ND）¹が 2015 年 1 月以来約 4 年半ぶりに政権を奪回する見込み。・・・与党の急進左派連合（SYRIZA）を率いるチプラス首相は、2015 年の総選挙公約で反緊縮を掲げたにもかかわらず、欧州連合（EU）との交渉で妥協し現実路線に転向。脱税や汚職の取り締まりなど、その他の公約でも成果を出せずに国民の批判を招いた。・・・一方、ND のミツォタキス党首は「経済成長」を公約に、チプラス政権で滞った国有企業の民営化や投資拡大の推進を表明。実現性のないばらまき政策を掲げるチプラス政権に対する国民の失望を背景に支持を伸ばした。…

本著を一言でまとめると、2009 年末勃発したギリシャ債務危機が続く中、2015 年 1 月に発足したギリシャ急進左派政権で初代財務大臣をつとめたヤニス・バルファキスの、7 月の辞任までの債権団トロイカ（EU、欧州中央銀行：ECB、IMF）との熾烈を極めた



革ジャンでオートバイ出勤するスキンヘッドのバルファキスは、ギリシャのブルース・ウィリスとよばれた。（絵：福田）

¹ 欧州債務危機は、ギリシャでの 2009 年 10 月の政権交代後（全ギリシャ社会主義運動：PASOK）、前政権（新民主主義党：ND）時代の財政赤字粉飾が露呈したことが発端となった（2009 年 GDP 比財政赤字 3.7%→12.7%（その後 15.6%に修正））。

戦いの記録だ。

ギリシャはトロイカからの金融支援の条件として、厳しい緊縮財政（歳出削減：公務員給与の削減、年金改革、公共投資削減など。増税）、構造改革（民営化、労働市場改革）を突きつけられた。これに対してバルファキスは、行き過ぎた緊縮への反対と債務再編を主張する。

バルファキスが指摘する債務持続性に関する IMF の誤りとは次の通りだ。

S (surplus) : 債権団に債務返済するためにギリシャが出すべき財政黒字

G (growth) : S を可能とする GDP 成長率

T (taxes) : 債務返済と国家運営のために必要な税金

これら 3 つの目標値が決まると、IMF とギリシャの間で覚書 (MOU) が取り交わされる。そしてギリシャ政府は、T の税金を可能とし、S に等しい財政黒字となるよう G の成長率を実現するために努力する旨約束する。S は債権団に債務返済を行うのに十分であり、したがって、ギリシャの債務は持続可能である、という内容だ。

しかし、S を生み出すための T は過大であり、政府が T に相当する課税を宣言しただけで企業の投資や家計の消費は落ち込み、G の低下を招く。このような国民生活に多大の痛みを強いる MOU は締結すべきではない、というのがバルファキスの主張だ (すくなくとも当初の SYRIZA の方針でもあった)。

バルファキスは SYRIZA のチプラス党首から乞われて財相として入閣した優秀な経済学者とはいえ、SYRIZA の中では浮いた新参者だ。トロイカに通じるテクノクラートの妨害にも対峙しなければならない。チプラスとの信頼関係も事態の悪化に伴い徐々に微妙なものになっていく。

ユーロ制度を守るために圧倒的な力をもって交渉に臨むトロイカ。これに対するバルファキスのチームは有能ながらも指折り数えるほどしかない。しかしバルファキスは孤軍奮闘したわけではない。世界の逸材が (それぞれの立場から) 支援の手を差し伸べたのだ。ジェームズ・K・ガルブレイス (テキサス大)、ジェフリー・サックス (国連事務総長特別アドバイザー)、ノーマン・ラモント (元英財相)、ラリー・サマーズ (元米財務長官)、ケマル・デルヴィッシュ (元トルコ財相)、エマニュエル・マクロン (仏経済相 : 当時、現フランス大統領) 等々 (オバマ大統領も支援の意向を示した)。彼らの協力も得てトロイカに対する強力な対案「ギリシャの財政再建と経済の回復・成長のための政策枠組み」が極めて短期間のうちに起草された。ところが、チプラスはこれを握りつぶす。チプラスはドイツから厳しい圧力を受けてトロイカ対決への意欲は萎えていたのだ。しかし、追い詰められたチプラスは突如トロイカの緊縮策受諾の可否を国民投票にかける決断を下し、緊縮策への反対票は過半を占める結果となった。ところがそれに

もかわらず、結局チプラスはトロイカの救済融資と緊縮要求を受け入れて現実路線に転向する。チプラスは心変わりしはじめたのではないかとの疑念を振り払いつつ、チプラスが最後には初心に立ち戻ることを信じてトロイカと戦い続けたバルファキスは、ここに至ってチプラスと決別し 2015 年 7 月辞任する。

— : — : — : — : — : — : — : —

原書の題名 *Adults in the Room* は、ギリシャの債務免除を支持する IMF の意見をユーロ圏が却下したことについて、記者からコメントを求められた IMF のクリスティーヌ・ラガルド専務理事の、怒りとともに口をついた言葉を引用したものだ。'For the moment we are short of a dialogue: the key emergency is to restore the dialogue with adults in the room.' (p.432) この交渉劇に登場するのはそれぞれの大義を全うするためとはいえ、実にとんでもないことをする男たちばかりだ。その中でラガルドだけが掃きだめの鶴のように映る。そして本著冒頭の謝辞はこう発言したラガルドに捧げられている。バルファキスとラガルドの間にはお互いの立場に対する深い理解に基づく敬意の念が培われたようだ。宿敵ショイブレ独財相との関係もまた違った意味で濃い。南欧や東欧といった「弱い環」への警告もこめ、ユーロ圏を守るためにギリシャが厳しい緊縮を受け入れるのか、さもなければユーロ圏からの離脱 (GREXIT) を迫るショイブレ。激しい議論の果てに、二人は奇妙な意見の一致に達する。ショイブレ曰く、'In the Eurogroup you are probably the one who understands that eurozone is unsustainable. The eurozone is constructed wrongly. We should have a political union, there is no doubt about it.' (p. 409)

本著は今も現職として活動する関係者とのやりとりを克明につまびらかにしているが、このような交渉のプロセスは極秘扱いとすることが原則だ。ところが、バルファキスが守秘義務違反を指摘されたケースは見当たらない。おそらく関係者は苦々しく思いながらも無視を決めこんだのだろう。一方、バルファキスは二度とインサイダーになれない (ならない) ことを覚悟の上で本著の発行に踏み切ったのだろう。本著の序章の中でラリー・サマーズが真夜中のホテルのバーで、バルファキスに権力側のインサイダーになるのか、それともアウトサイダーになるのかの選択を迫るシーンは凄味がある。これに対してバルファキスは、ギリシャにとってまともな協定をトロイカと結べないのなら、躊躇なくアウトサイダーになる意志を表明する。サマーズは短い沈黙の後にこう応えた。'Fair enough.' (p.8)

世界で最も困難な仕事を引き受けた財務大臣とも言われたバルファキスを支えたものは何だったのだろうか。前述の世界的な著名人もさることながら、身近な声なき市井の人々を強く意識している。ホームレスの通訳ランブロス ('Do something for them. Not for me! I am finished...please do something for those who are still on the verge. Who are clinging to their fingernails...') (p.18)。前政権の緊縮策によって解雇され寒風の中でストを続ける官庁の清掃員のおばさんたちの声もそうだ ('Don't betray us!') (p.151)。

ギリシャ人だけではない。ECB 本部のあるフランクフルトに出向いた際にドイツ側があてがったシークレットサービスの言葉を、バルファキスは以後ユーロスケプティクと直面するたびに思い起こすこととしているという（‘Minister, I want you to know that what you are doing is very important – not only for your country but also for us. You are giving us hope that there is a chance that we shall be liberated too.’）（p.205）。

それとなによりも彼に常に寄り添うパートナーのダナエと、遠くオーストラリアで暮らす愛娘クセニアだ。なお、離れて暮らす娘のためにやさしく経済を語るバルファキスの本が最近翻訳出版されている（*Talking to My Daughter about the Economy*（関美和訳『父が娘に語るが美しく、深く、壮大で、とんでもなくわかりやすい経済の話』ダイヤモンド社、2019年））。

バルファキスの物語は財務大臣辞任で終わらない。その後バルファキスは EU を内側から民主化するための汎欧州政治活動を始めるとともに、米民主党左派のバーニー・サンダースとも連携しはじめている。また、バルファキスは今回のギリシャ総選挙で自ら設立した反緊縮政党 **MeRA25** を率いて善戦し当選を果たした。

一方、7月2日に開催された EU 首脳臨時会議において、次期 ECB 総裁候補にラガルド IMF 専務理事が指名された。これらはヨーロッパが大きく変わっていく兆しと見ていいのだろうか。そして日本は。